

P-065

在宅医療的ケア児の親の
援助要請スタイルとソーシャルサービス
利用状況の年齢層別比較齊藤 麻子¹、西田みゆき^{1,2}¹順天堂大学保健看護学部²順天堂大学大学院 医療看護学研究所

【目的】

医療的ケア児の親の援助要請スタイルとソーシャルサービス利用について子どもの年齢層別に特徴を明らかにする。

【方法】

医療的ケア児(0~18歳)を養育する親に対する無記名自記式質問紙調査。①子どもの年齢、医療的ケアの状況、②ソーシャルサービスの利用状況、③親の援助要請スタイル、④ソーシャルサービスへの意見(自由記載)を分析対象とした。子どもの年齢層は、0~6歳(未就学児)、7~12歳(小学生)、13歳以上(中学生以上)の3群に分け、①②③は記述統計、 χ^2 検定、Kruskal-Wallis検定、④はカテゴリー分類による分析を行った。本研究は、研究者の所属機関の研究等倫理審査の承認を得て実施した。

【結果】

104人から回答(回収率45.8%)を得た。回答者の99%は母親であった。医療的ケア児の平均年齢は8.9(SD=4.9)歳で、0~6歳40人、7~12歳34人、13歳以上29人、重症児スコアを用いた医療的ケア度はAve.18.4(SD=13.8)点で年齢層が高いほど医療的ケア度が高かった。年齢層別で利用率に差($p<.05$)があったソーシャルサービス項目は、「障害児福祉手当」「日常生活用具購入費用助成」「居宅介護」「訪問診療」「短期入所」「児童発達支援」であった。親の援助要請スタイルは、子どもの年齢層が低い群ほど家族に対する積極的な援助要請得点が高かった($p<.05$)が、医療者に対する援助要請得点では年齢層で有意な差は認められなかった。親の援助要請スタイルとソーシャルサービス利用には関連がなかった。ソーシャルサービスへの意見では、各年齢群で「情報の不足」「内容の理解困難」があげられたが、0~6歳では「利用せず家族で対応」「感謝・満足」、7~12歳では、「学校生活」「訪問系支援」、13歳以上では「短期入所」「将来の不安」に関する意見が特徴的であった。

【考察】

年齢層別でソーシャルサービス利用率の差や特徴的な意見がみられたが、これは子どもの社会生活の範囲の変化によりサービスニーズが変わるためと考える。また、医療的ケア児の年齢が低い群の親ほど家族に対する援助要請が積極的であったが、子どもが幼い時期は既存のソーシャルサービスを利用せず家族内で対応していることが多いためと考える。医療者や行政には子どもと家族のライフステージの節目に合わせた分かりやすい情報提供が望まれる。

P-066

医療的ケア児等コーディネーターの
役割実践の実際金泉志保美¹、岡本奈々子²、柏瀬 淳¹、青柳 千春³、
阿久澤智恵子⁴¹群馬大学大学院 保健学研究科²東京医科大学医学部³東京家政大学人文学部⁴京都大学大学院 医学研究科

【目的】

医療的ケア児の地域での生活を支援するために、2018年より医療的ケア児等コーディネーター(以下コーディネーター)の養成が行われている。しかし、養成後のコーディネーターが実際にどの程度の実践ができていのか評価はされておらず、役割を果たすために求められる具体的なスキルについても未確立である。本研究は、医療的ケア児等コーディネーターの役割実践の実際を明らかにし、実践に必要なスキルを抽出するための基礎資料を得ることを目的とした。

【研究方法】

関東甲信越地方にある3県のコーディネーター養成研修終了者で研究参加への同意の得られた10名を対象に半構成的面接を実施し、質的記述的方法を用いて分析した。面接内容を逐語録化し、意味のある文節単位でコード化し、さらに意味内容の類似性に従ってサブカテゴリ化、カテゴリ化した。本研究は、研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。【結果】医療的ケア児等コーディネーターの役割実践として512コード、100サブカテゴリが抽出され、【多職種で連携して対象児を支援するためのチーム形成を目指す】【支援者間の関係性を構築しながら多職種で対象児を支援する】【対象児・家族の状況をアセスメントする】【対象児の状況とニーズに合わせた支援の調整をする】【医療的ケア児受け入れ経験のない施設等での受け入れ実現のためにサポートする】【家族と関係機関の間に立って仲介・調整をする】【家族それぞれの状況やニーズに応じた支援をする】【対象児と家族をエンパワメントする】【医療的ケア児等コーディネーターとしての役割を明確にしながら動く】【従来の職務にコーディネーターの要素を付加して機能する】【知識と経験の蓄積に努める】【地域全体として医療的ケア児支援に取り組めるように動く】【医療的ケア児に関する専門的知識を関係者へ提供する】【他の相談支援専門員をバックアップする】の14カテゴリが生成された。

【考察】

コーディネーターは多職種でチームとしてかかわるための連携先の開拓と関係性構築を進めていること、対象児・家族と継続的にかかわりエンパワメントしながら状況の変化に応じた支援調整を行っていること、地域における医療的ケア児支援の向上に向け活動していること等が明らかとなった。本研究の結果から、養成研修のみでは学ぶことの難しい可視化されていないスキルを具体的に抽出していきたい。